

日々好日

(令和八年四月発行)

温暖な瀬戸内にあっても春は待ち遠しいものです。春は若者が次なる境地を求めて大きく羽ばたく季節である。自然も桜をはじめ色とりどりの花々を咲かせてそれを祝福し応援する。

そこで、物言わぬ器物までも生まれ変わらせたいと、四十数年の長き間護持し続けてきた高野山奥之院の聖燈が、聖燈ローソクの製造中止で、燈籠は役目を終えた感がありました。煤で汚れた紙をポリエステルで張替え、溶けた蠟をきれいに取り除いて、豆電球を灯す置燈籠として蘇らせ納骨堂に常夜灯として安置しました。

ローソクの燃焼管理の必要もなく火災の心配もなくなり、本尊も納骨の諸精霊も喜んで下さっているに違いなく、これが老骨の春先のささやかな手仕事でした。



弘法大師のお言葉

「遅々たる春の日、風光動く。陽炎、紛紛として、曠夜に飛ぶ」  
(性霊集卷大十・十喻を詠ず)



一見  
阿字

真言  
得果



【釈迦誕生佛・当山蔵】

五逆  
消滅

即身  
成佛

好日



西紀前六世紀の末にシヤカ族の王子として誕生されたお釈迦さまは城中の快適な生活の中で、生老病死の無常の現実を目にされ、その苦よりの救済を求めて出家され、六年の苦行を棄捨されて尼連禪河で苦行の汚れを洗い清められ、程近くの無憂樹の下で端座瞑想され悪魔との闘いに勝利されて正覚を得られたのです。それがいわゆる縁起の法と言われるものです。

その佛教はインド国内はもとより紀元前後、中央アジアを経て中国にもたれされ、その間も様々に変遷をとげ更に、朝鮮を経て我国に伝来し、よくも悪くも日本民族ならではの色彩が加えられた。

インドでの初期佛教は国王などの権力者よりも、むしろ民衆のほうが、佛教に対し熱心であったという。その佛教も中国に伝来すると事情は全く異なつて皇帝などの支配者とその一族のもとでの佛教であった。

我が国には欽明天皇七年（五三八）に公式に伝来し、推古天皇二年（五九四）に【三宝興隆の詔】が発せられて佛教は我が国に定着した。

こうして奈良時代の佛教全盛時代も皇室と藤原家による政治が行われましたが、平安初期の天台宗の最澄も真言宗の空海も日本佛教の偉人中、天皇家、藤原家に血の繋がりのない最初で最後の人だとされています。

それはともあれ宗派の開宗宣布も朝廷の許可なくは一も始まりません。高野山開創もそうであり、真言宗も鎮護国家を標榜し、大師の晩年には後七日御修法を恒例とするなど、律令国家と

密接な関係にあったのは時代の趨勢であった。

さりとて大師の開宗された真言宗が庶民大衆と無縁

の教えであるというのは正当な評価ではないことは申す



までもありません。

お四国遍路などでいわれる「同行二人」の信仰は日常生活のなかにおいても確立されているということです。

日本佛教を語る上で無視できないのは末法思想を抜きには語れません。末法は正法に対するもので、正法は仏陀の正しい教えが存在し、修行し悟りを得ることのできる期間で、千年とも五百年とも称されています。

その後、正法の代用品として像法（似て非なる教え）があらわれ、それさえも消滅して訪れたものが末法（仏の教えが滅する）の時代となるというようなことが信じられたのである。

その年月も定かではなく正法も像法もそれぞれ千年とも五百年ともいわれ、末法は永遠に続くと考えられている。

ここで問題となるのはその期間の長短ではなく、末法の世に生まれたという絶望感が、仏法への信頼を喪失させたのである。

中国でも六世紀の中頃から末法がいわれるようになりましたが、それは社会的な混乱に基づく人々の生活不安がかきたてられての悲観論でもあります。

我が国でもお大師様と同時代の天台宗の最澄も末法を意識されていたようですが、大師も著作「秘藏寶論」「十住心論」で正像末の説明はしておられますが、真言宗は末法相応の宗教だとは申されてはいません。むしろ「正像なんぞ分かつた」と、これにとらわれない教えであることを強調しておられます。

しかし、最澄の比叡山で学ばれた鎌倉佛教の各祖師たちは末法相応の教えだとして法然上人は浄土宗を、日蓮聖人は日蓮宗を、親鸞聖人は浄土真宗を開宗されました。

これとは別に、栄西禅師は臨済宗を、道元禅師は曹洞

宗なる禪を殊とする宗派を開宗されました。

こうして鎌倉時代には、今日の日本佛教の主だった宗派が産声を上げましたが、それは釈尊の想像だにされなかつた教えも含まれていません。

佛教を名乗る以上厳然たる基準があります。それは人間が人間的実践によつて人間の理想を実現することである。つまり菩提心をもつことである。

その理想を実現するために戒（道德的規準）禪定（瞑想・静観）智慧（宗教的叡智）の三つが基本的条件でこれを欠くものは佛教とはいわれない。

その一方で、仏陀の慈悲は無限で、弱者の味方であることも事実で、本来悟りを求めるつまり解脱の宗教である佛教が救済の宗教ともなり得る要因がそこにあります。救済の宗教というかたちをとればそこに他力の思想が出てきます。そこでは浄土往生により菩提の完成をみるつまり極楽往生と成仏が同一視されるようになったのです。

しかし、これは本質的な佛教とはかなり隔たりのある宗派の誕生ということになります。この阿弥陀仏の救済を信じる念仏門とは対照的に、日蓮は国家の国難救済をかかげて妙法蓮華経の題目を唱える特異な宗派ということになります。この二つはその後日本佛教の中でおおきな比重をもち、日本佛教とは彼我のことだというまですになったのです。

禪定一筋の禪宗寺院も後には死者儀礼だけでなく祈祷所として武士の要求に応じるようになったのも祖師の思いを逸脱しているのですが、それは時代の要請でもあつたといえようか。

ここで先に掲げた戒についてみてみましょう。

「元来、仏道修行の要は戒律を守つて罪過を離れ、心身を清浄にし禪定を修して心を定め清浄なる叡智を養い、世界人生の

実相を達観して煩惱を断尽することにある。

これ戒定慧は三学として古来用いてきた仏道修行の三大綱目である。この三学において戒によつて生活を清浄にしなかつたなら定を修することは出来ず、定なくして真の智は得られない。

戒は佛教信者としての生活方規であり、佛教精神の外的生活的具現である。したがつて戒は佛教信者の標識である。佛教の生きるころ戒あり、戒あるころ佛教の存することを知り得るから、古来、戒は佛教の寿なりといふのである」

（戒律の思想と歴史） 上田天瑞著

「人となる道、此の人と共にいうべし。此の道を全うして天命にも達すべく、仏道にも入るべきなり。十善なり。世間世間に通じて大明燈となる。

人となる道とは昔より人間にして人間の分斎を失う者多し。大聖仏世尊この世に出現したまいて、この人をして人たらしむ。これを人となる道と名づく。

凡そ、佛法は主として生死出離の深義を説けども初門はこの人となる道なり。若し深密の義によらば此の人間世界も仏浄土と異ならぬなり。

此の人と共に云うべしとは、此の人間世界は賢聖の在す処なり。仏のあらわれたまう処なり。この人間は賢聖ともなるべく、仏ともなるべき器なり。

この道、深甚なれども現今の人を除いて外に大根機を振ふべきにあらず」

（慈雲尊者・その生涯とその言葉） 木南卓一著

戒律を守ることによつて己がこころを淨め、その清らかな心で瞑想に入る。こうした精神統一によつて外界の束縛を離れ思念を高次の精神状態に高めていく。これは単に心を空しくすることではなく精神が新たな自由な境

地を開拓していく。こうして精神的に高次の世界を体験する。そのとき叡智を体得する。この叡智で宇宙大自然の実体を得るのです。それが、縁起の法であったと言っているでしょう。

これによつて諸行無常、諸法無我なる宇宙の実相、真理、真実たるを知つてあらゆる執着から解放される。これは誰でもが至りつくことの出来る境地であり、実在の世界である。

理論上では戒を持し、清らかな心で瞑想禅定すれば仏陀の到達された境地に至りつくことが可能だということになります。このことが佛教の本道本質であるということなのです。

つまり、このような道徳的実践の伴わないところに佛教はなく、聞法だけでは佛教徒たりえないということになります。

このような佛教の本質論がある一方で、今日なお日本に佛教が存在しているのは死者儀礼に負うところが大きなことは否定しがたい事実である。浄土門の宗派が過半の支持を得ていることも頷けることである。

そして、加持祈祷が真言宗の専修でなくなったのも故なきことではありません。

「」ここで考慮しておかなければならないことは、密教がその外観に於いて人間的欲望の追求Ⅱいわゆる現世利益Ⅱに終始しているように見えるにも関わらず、そのインド的起源において神秘主義な哲学的世界観にもとづいたものであり、密教の巨匠たちは東亜においてもその理論的基盤を見失つてはいないという事実である。

日本の真言宗の開祖空海は理論(教相儀礼(事相)との完全な調和を図り、独自の宗教組織を完成した。ただし、我々はシャーマニズムに同化した変態的な宗教儀礼がお

くの亜流によつて濫用されているという事実をも見落としてはならない。」「佛教」Ⅱ渡辺照宏著Ⅱ岩波新書

時代が移り環境が変われば佛教の形体がかわるのはとうぜんですが、それでも佛教は上求菩提・下化衆生を忘れてはなりません。これは自分自身の為にとどこまでも高い理想を追求し、本格的な高い理想を実現しようとする努力することであり、その上ですべての人たちの幸福を増進させるために努力を惜しまない。これ以外に佛教はありません。

これに加えて密教は、われわれ人間の本性を自覚することによつて、最高の人間完成を目指し、それと同時に調和と秩序ある密厳浄土の完成に向かってたゆまざる努力を続けることが至上命令とされています。

「いふならく、

佛心とは慈と悲なり。

大慈は樂を与え、

大悲は苦を抜く。

抜苦は軽重を問うことなく、

与樂は親疎を論ぜず」

(性霊集巻第六)



(釈尊誕生の地・ルンビニ園)

もう少しまともな日本佛教を書いてみたかったです。が、まとまりのない情けないものになってしまいました。が、手元の佛書を参考にしたものですが、他宗派の学者の著作では全く異なる内容になることもあるのかとも思います。これもおシャカ様のご誕生の日を前にした老衲の、「佛教とは…」という難問に一つの答えを導き出したいという一存のことであることをご理解いただければ幸いです。



## あとがき

季節は春だというのにこころは晴れません。イランの核開発阻止をにかけて話し合いの中にもかかわらずアメリカとイスラエルが戦争をしかけたのです。ミサイルや無人機が飛び交っています。

理由は何であれ国民大衆を地獄に突き落とす戦争は即刻停止して欲しい。物価高騰よりも人命軽視がゆるせないのです。

三月十一日は東日本大震災から十五年。未だに完全復興はなっていないし、行方不明者も数知れません。家族を亡くし家財を失った人の憂いは歳月を経ても癒えることはありません。原発事故で土地を追われた人の苦難の程も窺いしれないがあります。

これは天災ですが、戦災は正しく人災です。国家間の難事も話し合いで解決してほしいということです。強いものが勝ち誇れるのはスポーツの世界だけであって欲しいということです。

このところ、戦前の予兆を感じるのは老者のおとろえた五官のなせるものであれば幸いである。

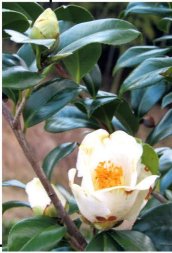
境内は梅、椿、水仙などがつぎつぎと咲き、桜のつぼみも大きく膨らんできました。世界中で希望が膨らむ季節であってほしい。

発行者

高野山真言宗

寶池山 龍

門 寺  
吉 岡  
光 昭



「天上天下

唯我独尊」

釈迦誕生偈の

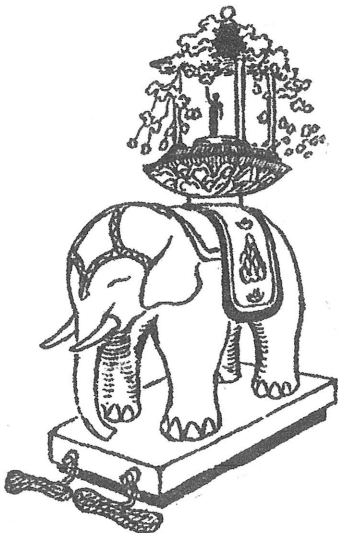
意味深し

卯月八日の

花祭り

左手で天指す

御像は珍しき



岩国市通津3634番地3 〒740-0044

高野山真言宗

寶池山 龍門寺 発行

電話 岩国(0827)38-4611